


成人向け

井回たかじん脳内商店街

絶対見逃せ!



井口たかじんにごさいます

StS、A'sと逆時系列から視聴している輩ではありますが、結構フィギュアの後押しも加わって描きたい衝動に揺さぶられまくっております

そんな中で前回のなのは本で表紙のスバルを差し置いて実は一番ページの多かったという有様の描いて嬉しいキャラがフェイトちゃん

金髪水樹キャラ萌え(なんじゃそら)の僕としては格好の獲物(そこに愛はあるのかと問われる様な問題発言)でして、尚且つコピー誌の時にも書いたんですがフェイトちゃんが醸し出す独特の「どんな目に遭っても大丈夫だよ」感が堪りませんです

大概のエロ妄想を実行に移しても割と短期間で「平気だよ」と、乗り越えて見せるフェイトちゃん

そんなフェイトちゃんが大好きです

ある日…

目が覚めると

私は全裸で碟台に括られていた…

そして私の目の前には一人の気配が…

その視線はとても卑猥な目で

私を見ているのが判る…

男性器を露出させながら…

私の顔、私の胸、私の恥ずかしい所…

裸の私の全身を、

男は股間を膨らませながら

いやらしく、舐め回す様に

眺めている…

股間を滾らせ、

私に見せ付ける様に…

抗おうにも全身の力が入らない…

この場から逃げ去る事も出来ず…

私の肢体はただ為されるがままに

その卑猥な視線に

弄りモノにされている…

次に気が付くと  
そこには無数の十字架が地面から突き出た空間  
その一本に私の肢体が磔られている……

先の状況とは違い  
人の意識は感じられない……

ただ晒されてる……  
ただ磔られている……

この不気味に無機質な空間に……

私の肢体に微風を絡ませながら……

この静寂が、不安を募らせる……

この器具歯まるで  
呼吸をする様に  
私の直腸の腔で  
伸縮を繰り返す…

肛門の至る所を刺激され  
私は思わず声を上げる…

時には苦悶を  
時には絶叫を…

その時の膨張加減によって  
私は臆面無く  
声を張り上げるのだった…

あまりの気味の悪さと

目を逸らし、気が付けば  
無数の包帯に包まれ  
不自然な体位に  
操られている…

肛門には何かしらの器具が挿入され  
違和感を強要されている…

意識を失う度に  
私は別の空間の  
住人となっている…

悪夢…これは  
悪夢なのだろうか…？

気が付けばそこは  
病院を思わせるベッドの上…  
相変わらず私は拘束され  
自由を奪われている…

今度はいやに現実的な空間だ…

それだけに純粹に  
恐怖を想像させる…

私の知識のある物が  
私をどの様に対処するのか…

幾許の可能性が私の脳内を過ぎる…

それは悪戯じみた事から  
死への覚悟を感じさせる物まで…

悪夢なら悪夢のままでもいい…

私の今の現実が幸せに満ち溢れたものだけに…

悪夢と割り切ったただだからだろうか？  
その後の状況は  
やけに特定の行為へと  
変化していった…

椅子に四肢を固定され  
無機質な器具によって  
私の恥ずかしいトコロが  
極限まで拡張され  
深層部まで晒されている…

人かの気配は感じない  
誰かの視線も感じない

しかし人為的に施されたとしたか  
想定できない形で固定された  
この状況…

「私…女の子として  
最も恥ずかしいトコロを  
見られちゃったんだ…」

悲しい想像に  
思わず頬を染めたのだった…

状況はますますエスカレートし  
医療器具の拘束から  
罪人の様な枷を嵌められた...

そこに待ち構えていたのは  
複数の滾る男根...  
はち切れるばかりに勃起し  
その標的を私に向けて.....

私の肢体に  
一斉に  
射精した！

纏わり付く精液...  
咽せ返る様な淫臭...

私に触れる事無く  
その男根は  
私を弄っているのだ.....

「私...  
汚されちゃった...  
私...  
犯されちゃったよ...」



今までに無い嫌悪感を感じたせいかな

次の状況は幾許か

緩やかな状況だ…

拘束状態は已然の儘だとしても  
足部にバリアアジャケットの  
タイツを着用している…

今まで獣の様に糸纏わぬ姿から  
辛うじて「私」で、ある事の  
認識できる衣装を身に着けているのだから…

悪夢の中に

ささやかな安堵を感じている…

私はもうかなり

感覚が麻痺してしまっているのかもしれない…

その安堵の刹那  
股間に違和感を走った！

性器に挿入人物が…

肛門にさっきの精液が…

僅かばかりの安堵感に浸り  
麻痺のせいで気づかなかったのか…

「女の子の大事なトコロが  
汚されちゃったよお…」

過去に受けた苦痛とは違う  
悲しみを感じ  
私は瞳を潤せるのだった…

どんな格好でも悪夢には変わりないんだ  
私は悪夢に弄ばれているんだ……

たとえ股間が覆い隠されてもそれは私を弄ぶ為の淫具……

案の定、股間を覆う下着は肛門を無防備に開肛させ  
繋がれたチューブから液体を無慈悲に注入させている……

膨張する下腹部

圧迫される内臓……


苦悶に顔が歪む……

かき回される腸内は  
限界を迎えていた……

「苦しい！苦しいよお！  
もう止めてえ！もうお尻に入らないよおつ！  
誰かつ！誰か止めてえ！お腹が破裂しちゃうよおお……！」

私の力無い叫びは  
ただ空しくこの部屋で  
響くだけだった……





最初の頃と打って変わって  
露出部分の少ない衣装…  
しかし恥部だけを露出させている  
紛れも無くこの衣装は  
私を弄ぶ為の衣装…

最初は撫で回す様だ…  
やがて私の肉体を貪る様だ  
揉みし抱いていく…

衣装越しに感じる  
人肌の感触…

いよいよ味わう

「人」による凌辱…

そして私の敏感な下コロを  
手を差し伸べる…

「いやあーきゅっ…触らなななっ…  
そんな汚い手で私を触らなななっ…」

この悪夢…  
いや…淫夢は  
エスカレーターを続け  
止め処無く続く…

私の恥ずかしいところを  
余す所なく覗りつくし

私の肢体は玩具の様だ  
弄ばれている…

「やだ…やだよ…  
そんなところかき回さななでえ…  
お尻の穴…くすぐったいの…」  
グチユツ!  
「ああっ！そ…アレ…  
その…その奥の…ダメ…  
穿うちやいやあ！  
いやあ…ソレはダメなのお！  
あああああ…お尻の奥…  
グチユツグチユツしてる…  
わ…私…  
おかしくなっちゃったわ…」

舞台は最初期の十字架

そして以前の様に全裸の私……

あの時との違いは

私と同じ様に磔にされた女の子たち

そして状況は異様さを極め

無数の異形の触手が

肢体を貪り、襲い掛かってくる

滑る触手は性器を執拗に嘗め回し  
陰唇を弄り倒し  
膣内を穿り回す

一連の行為に飽いたら  
肢体を締め付けてくる

既に何人かの女の子は

驚愕と哀願の絶叫と共に

その肢体を無数の触手に飲み込まれ

肢体の隅々を凌辱されている……

私のこの肢体も

触手たちに飲み込まれるのは

時間の問題だろう……

最早抵抗する力を失った私は

ただひたすらこの悪夢が醒める刻を

待つしかなかったのだ……



「!」

悪夢の中で触手に飲み込まれたその瞬間  
いつものベッドの上で

ようやく私は目が覚めた……

シーツは破けんばかりに乱れ

身体は汗びっしょり

大きく声を上げたのだろうか？

喉はカラカラに渴いている……

長かった淫夢……

まだ恐怖から身体は震えている……

あれは一体なんだったんだろうか？

私の思いつく限りの恐怖？

それとも女性として持て余している

この肢体の願望？

真意の程は定かでないにせよ

再びあの淫夢の渦に

飲まれる事も臨んでいるのだった……

そいつ...

な...  
何...何なの...

こ...  
これって...

その刻は突如となく訪れる.....



# 頒布停止中

プレ版にあたるコピー誌の歳に  
時間不足から説明できませんでしたが  
このフェイトちゃん本のテーマは"拘束"です

1期の時のイメージもあるんですが  
僕のような猥褻脳細胞にとっては  
バリアジャケットも何かと拘束具として  
目に入ってしまうまして、それなら  
色々フェイトちゃんを括り付けたり  
固定してしまおうと、思い立ったのが  
この本でございます

と、まあ単純なエロスで申し訳ありませんが  
楽しんで頂ければ幸いです

あと、このページに使われてる思わしげなカットは  
コピー誌の際に消しが薄いとの  
スタッフの指摘があった為に  
修正作業で頒布が遅れる告知の際に  
即席で描いたモノです

サ●クリスタップがコンビニのコピー機に  
書類を忘れてたと指摘したブロックノートの  
カットが日の目を見なかったのは残念

発行元：山 櫻

著者：井口 たかじん

印刷：(株)しまや出版 様

URL：[www.sakura.zaq.jp/takajin/](http://www.sakura.zaq.jp/takajin/)

E-mail：[dkbtd806@kyoto.ne.jp](mailto:dkbtd806@kyoto.ne.jp)

発行日 平成 22年 2月 7日 発行